

『二人の貴公子 (The Two Noble Kinsmen)』における エミリアの嘆願

辻川 美和

序

『二人の貴公子 (The Two Noble Kinsmen)』は、シェイクスピア (Shakespeare) とジョン・フレッチャー (John Fletcher) の共作であり、『ペリクリーズ (Pericles)』から『嵐 (The Tempest)』までのシェイクスピアのロマンス劇と呼ばれる作品群の後、1613-14年頃に書かれた、シェイクスピア劇の中では最後の劇にあたる重要な作品である⁽¹⁾。この劇にはロマンス劇に見られた最終場面での家族の和解と再会はなく、その結末は苦みに満ちている⁽²⁾。

『二人の貴公子』の物語は、アテネの公爵シーシェウス (Theseus) とヒポリタ (Hippolyta) の婚礼の行列を3人の王妃達が遮り、夫達の亡骸を埋葬させないテベの王クレオン (Creon) と戦ってくれと嘆願するところから始まる。シーシェウスは、婚礼を延期して戦いに赴いて勝利し、クレオンの甥で従兄弟同士のパラモン (Palamon) とアーサイト (Arcite) を捕虜にする。アテネの牢に閉じ込められたパラモンとアーサイトは、窓からヒポリタの妹エミリア (Emilia) を見て2人とも恋に落ち、争い始める。その後、国外追放になったアーサイトは身をやつしてエミリアの従者となり、パラモンは牢番の娘の助けを得て牢から逃げ出す。森の中で出会った2人は決闘を始め、そこにシーシェウス一行が通りかかり、許可なく決闘していた2人はシーシェウスから死刑を宣告される。しかし、2人の命乞いをするエミリア達の懇願によって、シーシェウスは前言を翻し、2人を公式に試合で戦わせて、勝者をエミリアの夫とし、敗者は死刑にすることに決める。アーサイトが試合に勝つが、試合後に、乗っていた馬が転倒し、アーサイトはその下敷きになって死ぬ。パラモンが死刑を免れてエミリアと結婚することになる。

この劇には、第1幕の最初から、喪服を着た王妃達の姿や、歌や台詞の言葉のはしばしに、暗く不吉な死の影が漂っている⁽³⁾。また、狂気や激情も重要なテーマである。主人公パラモンとアーサイトの強い友情による結びつきは、同じ女性を愛したことで憎しみに転じ、わき筋では、牢番の娘がパラモンに恋をして狂気におちいる。第1幕の最後の台詞である「この世は迷い道だらけの町、そしてすべての道がたどり着く先は死の市場。(This world's a city full of straying streets, /And death's the market-place where each one meets.) (I.v.15-16)」という言葉どおりに、劇は、狂気のような逸脱した激情によってさまようそれぞれの登場人物を描き、死のイメージで終わる⁽⁴⁾。

そのような登場人物の中で、パラモンとアーサイトに愛される女主人公エミリアは、シェイクスピアのロマンス劇群の女主人公達よりも、むしろ、それ以前の問題劇である『尺には尺を (Measure for Measure)』のイザベラを連想させるところがある。尼僧見習いのイザベラと同様に、エミリアも劇が始まる時には一生男性を愛するつもりがない。そして、イザベラが兄の命乞いをしたためにアンジェロの毒牙にかかりかけ、最後には公爵に結婚を申し込まれるのと同様、エミリアも劇中で他人のために嘆願や命乞いをしたために、望まぬ結婚をする結果になる。

ただし、『尺には尺を』でイザベラを追い詰めるものが権力者であるアンジェロや公爵の力であるということは見て取りやすいが、『二人の貴公子』でエミリアを結婚に追いやる力を、シーシェウスの体現する家父長制的政治権力のみに見ていいかどうかには疑問が残る。たしかに、そのような見方も可能であり、特に、エミリアが大切にしている女性同士の絆を、支配者シーシェウスの専制君主的な力に抵抗する力として読み解いたローリー・J・シャノン (Laurie J. Shannon) の論には非常に説得力がある。しかし、この劇では、人間の社会の力だけではなく、シェイクスピアのロマンス劇群からの流れである神々や運命などの人間以外の力の影響も重要であるように思える。

『二人の貴公子』では、ロマンス劇と同様、超自然の力が人間の運命を動かす大きな要因になっているが、その表現はロマンス劇と異なっている。この劇では、超自然の存在が『ペリクリーズ』での女神ダイアナや『シンベリン (Cymbeline)』でのジュピター、『嵐』のエアリエルのように明確な存在として舞台に登場するわけではない。人間は神々の名を頻繁に呼び、“heavenly Justice”、“gods”、“heavenly powers”、“Fortune”等の超自然の力の影響に何度も言及するが、それらの力がどのように働くかについては、人間の解釈のみが示される⁽⁵⁾。第5幕でのマルス、ヴィーナス、ダイアナの祭壇への祈りの場面では、神々は直接登場せず、甲冑のたてる音と雷鳴、鳩の羽ばたきの音と音楽、薔薇の木といった音や物が現れ、人間が、それを神々からの徴として解釈する⁽⁶⁾。

エミリアの運命のゆくえも、家父長制などの人間世界の力だけではなく、「神々」や「運命」と登場人物達が名付けている力にも影響を受けていると考えられる。しかし、その力の表現は、第5幕での神々からの徴以外においては、常に人間側からの解釈としてしか語られない。このため、本稿では、エミリアを追い詰める力が何であるかを追求するのではなく、エミリアが翻弄される様子

に焦点をあてて詳細に分析する。これにより、最終的には、『二人の貴公子』における「神々」や「運命」の表現についても、逆の方向から照らし出すことができるのではないか。

まずは、エミリアの行動の原因となる、女性との絆を大切に男性との関係を忌避するという明確な価値観が、テキストにどのように表現されているのかを示してから、その価値観に従ったエミリアの主体的な行動とその結果がどのようなものであったかを論じる⁽⁷⁾。そのエミリアの行動とは、劇の始まり、中頃、終盤に行われる3回の嘆願であり、この嘆願は『二人の貴公子』の物語を動かす重要な要因となっている。この構造をテキストに基づいて詳細に分析することで、ロマンス劇の後のシェイクスピアによる人間の運命の描き方の一端を示すことを目指したい。

1. エミリアと女性同士の絆

エミリアは、第1幕で、女性同士の関係を大切に男性との関係を忌避する人物として明確に描かれている。まず、第1幕第1場では彼女はあまり多くの言葉を発しないが、その言葉は、最初の台詞から、一貫して女性に同情的であることを伺わせる。第1幕でエミリアが最初に発する言葉は、ひざまずく3人目の王妃に向かって言う、「私にひざまずく必要はありません。/私がお力になれる、嘆きのうちにある女の方はどなたでも、/必ずお助けすることにしております。(No knees to me!/What woman I may stead that is distressed / Does bind me to her.) (I.i.36-37)」であり、女性を大切にするという基本的な特徴が印象付けられる。さらに、3人目の王妃の嘆願に答える台詞の中で、エミリアは「同じ女性であるあなたの悲しみは、激しく私の胸を打つのです (Being a natural sister of our sex, /Your sorrow beats so ardently upon me) (I.i.125-26)」と述べる⁽⁸⁾。この2つの台詞からは、エミリアが女性同士の絆を非常に大切にしていることが伺える。

さらに、第1幕第3場では、女性との絆へのエミリアの強いこだわりが明確に表現される。パイリトゥスがシーシェースを追って戦場へと出発した後、ヒポリタとエミリアはシーシェースとパイリトゥスの男同士の強い絆について話し合うが、その会話の中、エミリアは、11歳で死んだ女友達のフラヴィナとの関係について奔流のように語りだす。エミリアの語る女性同士の友情のイメージは、いまだ何者にも邪魔されないもの、閉じたもの、世界とは隔絶している無垢なものであり、エミリアによるその愛の描写は、たとえば次の一節のように、女性同士の関係でなければありえないイメージに満ちている。

The flower that I would pluck
And put between my breasts (then but beginning
To swell about the blossom), oh, she would long
Till she had such another, and commit it
To the like innocent cradle, where phoenix-like

They died in perfume.

私が花を摘んで、ちょうどその頃
ふくらみ始めた胸の間に挿すと、
ああ、あの子は、同じような花を手に入れるまで
ずっと求め続けて、私と同じ無垢な揺りかごに
挿しました。そして、花は、その場所で、不死鳥の
ように
香りを放ちながら死んだのです。(I.iii.66-71)

このような、エロティックな雰囲気さえ漂うエミリアの言葉には、女友達に対するエミリアの強い思慕の気持ちが表現されている⁽⁹⁾。ヒポリタに、「こんなに早口なのは、つまり、乙女フラヴィナと同様、男と呼ばれる者を愛することは決してないと言いたいわけなのね。(this high-speeded pace is but to say / That you shall never, like the maid Flavina, / Love any that's called man.)」と言われたエミリアは、「そう、決してないわ。(I am sure I shall not.)」と答えさえる。

このように、エミリアは、少なくともパラモンとアーサイトに愛されていることが分かる以前は、女性同士の絆を非常に大切にしており、永遠に男性を愛さないと確信している。

2. エミリアの嘆願

エミリアの劇中での行動や言葉には、女性同士の絆を大切に男性との恋を忌避するという姿勢が見え隠れする。それがよく表れているのが、劇のはじまり、中ほど、終わり頃にそれぞれ行われる3回の嘆願の場面である。まず、最初の嘆願は、第1幕第1場で、同じ女性である王妃達に同情してシーシェースにテーベ攻略を勧めるという行動である。2回目の嘆願は、第3幕で行われ、エミリアはパラモンとアーサイトの命を救おうとシーシェースを粘り強く説得するが、その提案は、男女の恋を重視しないエミリアの心性に基づいたものである。最後の願いは、第五幕での、処女性の女神ダイアナへの祈りである⁽¹⁰⁾。この3回の嘆願で、エミリアは数人の嘆願者の中で常に最後のもっとも重要な位置を占めている。その願いは必ず実現するのだが、常に、エミリアの望まない結果をも伴う。これから、その3回の嘆願とその結果について、詳しく分析し、エミリアの行動と言葉こそが、物語の方向を決める決定要因になっていることを示したい。

2.1. エミリアによる1回目の嘆願 (第1幕第1場)

まず、第1幕第1場の嘆願を見てみよう。シーシェースとヒポリタが婚礼を行おうとしている行列をさえぎるように3人の王妃達が登場する。王妃達は、シーシェース、ヒポリタ、ヒポリタの妹エミリアの3人の前に1人ずつひざまずき、戦いで敗れた夫達の屍をテーベの支配者クレオンが埋葬させてくれないとの嘆きを順番に述べて、シーシェースにクレオンと戦ってくれるようお願い出すが、シーシェースはなかなか説得に応じようとはしな

い。ようやくクレオンに戦いを仕掛ける気になってからも、まず婚礼を済ませようとするシーシェウスを、王妃達は、婚礼の前に戦いに赴くように説得しようとする。ヒポリタがひざまずいて、結婚を先に延ばして戦争に行ってくれと頼んだ後、最後にエミリアもひざまずき、シーシェウスに嘆願を行う。エミリアのその台詞が決め手となって、シーシェウスは説得を受け入れ、すぐにテーベ攻略に向かう。

しかし、このテーベ攻略の結果、テーベのクレオンの甥であるパラモンとアーサイトが、物語にひきずりこまれることになる。2人はシーシェウスの捕虜になり、閉じ込められたアテネの牢の窓から、エミリアの姿を見て恋に落ちて、最後にはパラモンがエミリアと結婚することになるのである。つまり、エミリアは、自分自身が行った嘆願によって、思いもかけず、結婚への道筋を作ってしまう。エミリアが嘆願した理由は、同じ女性である王妃達を助けようとしてのことであり、その結果、望まない結婚に追い込まれるというのは、皮肉な成り行きである。

運命の皮肉は、エミリアの行為の原因とその結果にとどまらない。実は、エミリアの嘆願の言葉自体が、嘆願によるそれからの成り行きを暗示しているのである。エミリアが、第1幕第1場でシーシェウスを戦争に赴かせるきっかけとなった台詞とは、次のようなものであった。「姉（ヒポリタ）の嘆願をお聞き届けにならないなら」とエミリアは言う。

from henceforth I'll not dare

To ask you anything nor be so hardy
Ever to take a husband.

私は、今後二度と、厚かましくも
陛下に何かをお願いしたりいたしませんし、
夫を持つなどという向こう見ずなことも永遠にいた
しません。(I.i.203-05)

シーシェウスがこのような順当な願いを聞き入れないような人間なら今後何を願っても仕方がないし、妻の願いを受け入れないのが夫というものなのなら、結婚などしたくはないものだという理屈であろうが、非常に強気の発言であり、シーシェウスは最終的にこの言葉によって説得される⁽¹¹⁾。しかし、実はこの言葉の内容こそ、皮肉にも今後のエミリアの暗い運命を示しているのである。シーシェウスが嘆願を聞き届けなければ今後は何もシーシェウスに願い事をせず結婚もしないということは、反対に考えると、シーシェウスが嘆願を聞き届ければ今後ともシーシェウスに願い事もするし結婚もするということになる。そして、実際、エミリアはシーシェウスに対して重大な願い事を行い、最終的には望まない結婚をすることになるのである。つまり、エミリアの第1幕第1場での嘆願は、シーシェウスのテーベ攻略によってパラモンとアーサイトがエミリアに恋をするという結果を呼ぶだけではなく、その言葉自体が、劇全体におけるエミ

リアの運命を皮肉な形で示してもいるのである。

2.2. エミリアによる2回目の嘆願（第3幕第6場）

エミリアによる2回目の嘆願は、第3幕第6場に行われる。身分を隠してエミリアの従者になっているアーサイトが、脱獄して森に潜んでいるパラモンのもとにやってくる。2人は互いに武装を手伝い合ってから決闘を始めるが、そこに狩りの最中のシーシェウス一行がやってくる。2人が許可なく決闘しているのを見たシーシェウスは、怒りにまかせてその場で2人に死刑を宣告する。パラモンは自分たちの素性と、2人の決闘の理由がエミリアを恋する権利を争ってのものであることを明らかにする。ヒポリタが、エミリアに、2人の死の原因として後世に悪名を残さないように命乞いを提案すると、エミリアは、自分には彼らの死の責任はないと述べつつも、「でも、私が女性であり、哀れみを持っていると示すために (Yet that I will be woman and have pity) (III.vi.191)」と言って、命乞いをすることを決める⁽¹²⁾。つまり、エミリアは女性としての価値の自覚が原因で、この嘆願を行うのである。ヒポリタとパイリトゥスも嘆願に加わる。これは Fletcher の手になる場面であり、1行から3行までの短い台詞を3人が交互に述べるため、第1幕での長い台詞を使った嘆願の重々しい印象とは異なるが、嘆願者の数が第1幕の3人の王妃に対応する3人であり、全員シーシェウスの前にひざまずくことから、第1幕第1場の嘆願との対応関係を読み取ることができる。3人の嘆願の締めくくりは、次のように行われる。

PIRITHOUS

To crown all this, by your most noble soul,
Which cannot want due mercy, I beg first —

HIPPOLYTA

Next hear my prayers —

EMILIA

Last, let me entreat, sir —

PIRITHOUS

For mercy!

HIPPOLYTA Mercy!

EMILIA

Mercy on these princes!

THESEUS

Ye make my faith reel.

パイリトゥス

そして、陛下の気高い魂にかけて、
慈悲のないはずがないその魂にかけて、私がま
ず頼みます。

ヒポリタ

次は私の願いをお聞きになって。

エミリア

最後に、私が

懇願いたします。

パイリトゥス

お慈悲を!

ヒポリタ

お慈悲を!

エミリア

2人の貴公子にお慈悲を!

シーシェース

誓いを守ろうとする気持ちがぐらつく。(III. vi.208-12)

ここでも、第1幕の嘆願と同じように、エミリアが最後の台詞を述べ、それを受けて、シーシェースの気持ちが動く。

さらに、エミリアは、3人での嘆願の最後を締めくくるとの言葉を述べるだけでなく、この後、シーシェースとの長い対話によって、シーシェースを説得しようとする。2人の追放を提案したエミリアに対して、そうすれば2人がアテネの外で決闘を行いエミリアの悪名をみだりに世に広めるだけだとシーシェースは反論するが、エミリアは、エミリアのことを口にせず、2度とアテネに足を踏み入れず、決闘もしないと2人に誓わせることを条件に追放すればよいと提案する。エミリアの嘆願は言葉数が多く、粘り強い。しかし、2人を追放して自分と2度と会わせないようにするという願いは、パラモンとアーサイトの自分への恋の想いをまったく顧慮していないことを伺わせる。これは、第1幕第1場の嘆願と同様、女性との絆を大切に、男性との関係を望まないエミリアの性質に基づく提案である。

当然のことながら、エミリアを熱烈に恋しているパラモンとアーサイトは、決してそんなことは誓わないとこの提案を拒む。シーシェースは、1人をエミリアと結婚させ、1人を死刑にすると決めて、まずエミリアにどちらかを選ばせようとするが、エミリアは、1人を殺すことになる選択などできない。そこで、シーシェースは、2人を後日の公式な試合で仲間と共に争わせ、勝った方をエミリアの夫に、負けた方は仲間3人と共に死刑に処することに決める。エミリアは、同意しないと2人とも死刑になるため、この提案にししぶ同意する。

このように、エミリアは、2回目の嘆願で、2人の命を助けようとシーシェースを説得したために、望まない結婚をさせられる事態に陥ってしまう。この嘆願は、女性であることの自覚を大切に男性との関係を忌避するエミリアの姿勢から出てきたものであった。また、この場面は、第1幕第1場のエミリアのあの最後の台詞、「私は、今後二度と、厚かましくも陛下に何かをお願いしたりいたしませんし、夫を持つなどというむこうみずなことも永遠にいたしません」に対応している。エミリアはシーシェースに願いをした。そして、そのために夫を持つことになるのである。

2.3. エミリアによる3回目の嘆願 (第5幕第1場)

劇中のエミリアの3回の嘆願のうち、最後のものは、第5幕第1場での女神ダイアナへの祈りである。パラモンとアーサイトのどちらがエミリアと結婚してどちらが死刑になるかが決まる試合の前に、アーサイト、パラモン、エミリアが、それぞれ軍神マルス、愛の女神ヴィーナス、純潔の女神ダイアナに祈りを捧げる。アーサイトは試合の勝利をマルスに祈り、パラモンは愛の勝利を

ヴィーナスに祈る。神殿ではそれぞれ徴が示され、パラモンとアーサイトはそれぞれ自分の勝利と解釈し、エミリアは自分がどちらかの男性の花嫁になるのだらうと考える。試合はアーサイトが勝利し、その後アーサイトの馬が転倒してアーサイトが死ぬという結果になる。3人の祈りとその結果についての最終的な解釈は、劇の終わり頃、シーシェースの次の台詞によって示される。

The powerful Venus well hath graced her altar
And given you your love. Our master Mars
Hath vouched his oracle and to Arcite gave
The grace of the contention. So the deities
Have showed due justice.

力あるヴィーナスは礼拝者に恩寵をもたらし、そなたに愛する者を与えた。我らの神マルスは神託を実現し、アーサイトに試合での勝利を与えた。つまり、神々は公平な裁きをくださったのだ。(V.iv.105-09)

このように、シーシェースは、マルスへの祈りがかなった結果アーサイトは試合に勝利したが、その後にヴィーナスへのパラモンの祈りがかなってアーサイトは死ぬことになったと解釈する。つまり、アーサイトとパラモンの祈りが試合結果と馬の転倒の原因とされており、ダイアナへのエミリアの祈りには全く触れていない。しかし、エミリアの祈りは、アーサイトの死とパラモンとの結婚という結末に、本当に何の影響も与えていないのだろうか。

『二人の貴公子』での3人の祈りの順番は、主材源であるチョーサーの「騎士の話」と異なっている。「騎士の話」では、まずパラモンがヴィーナスに祈りをささげ、次に、エミリー(エミリア)がダイアナに祈り、最後に、アルシーテ(アーサイト)が軍神マルスに試合での勝利を祈る。これが、『二人の貴公子』では、アーサイト、パラモン、エミリアという順番に変わっている⁽¹³⁾。エミリアが3人のうちの最後となっていることにより、女神ダイアナへのエミリアの祈りの重要性が増しているように思われる⁽¹⁴⁾。また、この3人という嘆願者の数と、最後の嘆願者がエミリアであることを考え合わせると、この祈りは、第1幕と第3幕の嘆願と対応していると考えられる。そうであるとすれば、第1幕、第3幕の嘆願と同様、エミリアのこの祈りも、劇の成り行きに影響を与えていると考えられないだろうか。

エミリアの祈りの内容は、チョーサーと『二人の貴公子』で異なっている。チョーサーのエミリーは、ダイアナに対して、まず、自分がまったく結婚したいと思っていないことを述べ、自分への2人の愛を鎮めてくれるようにと長い言葉を費やして祈る。そして、それが叶えられない場合に限って“hym that moost desireth me (私を最も求めている者)”を与えてくれるようにと願う⁽¹⁵⁾。『二人の貴公子』のエミリアは、「これは処女としての最後の礼拝。(This is my last/Of vestal office.) (V.i.149-50)」と言い、結婚する覚悟を決めている。エミリアは、ダイ

アナに “He of the two pretenders that best loves me/And has the truest title in’t (二人の求婚者のうち、私を最も愛し、/最も正当な権利を持つ者) (Vi.158-59)” が自分と結婚するようにと願い、そうでないなら処女のままいさせてくれと付け加える。微妙な違いではあるが、『二人の貴公子』のエミリアはチョーサーのエミリーよりは結婚する覚悟を決めており、結婚相手としてどちらが選ばれるかに関するエミリアの祈りの言葉の重要性も増していると思われる。

それでは、劇の祈りの言葉は、何を示しているのだろうか。“He of the two pretenders that best loves me/And has the truest title in’t (二人の求婚者のうち、私を最も愛し、/最も正当な権利を持つ者)” という言葉の意味は、実は曖昧である。後半の “has the truest title in’t” の “it” を、“best loves me” という行為だと考えれば、「エミリアを最も愛していて、最も愛していると真実主張することのできる者」という意味ととれる。この場合、エミリアの祈りは、「自分を最も愛している者」という1つの条件のみを表すことになる。しかし、後半を前半とは別の条件ととって、「エミリアを愛することについての最も正当な権利を持つ者」という意味だと考えることも可能である。チョーサーのエミリーの祈りにはない “the truest title” という言葉をわざわざ付け加えたことには、大きな意味があるのではないか。エミリアの祈りは、エミリアの意図がどうであったかは別として、「エミリアを最も愛している者」と「エミリアを愛することについての最も正当な権利を持つ者」という2つの条件を表していると考えたい。

エミリアの祈りがかなえられたと仮定すると、「エミリアを最も愛している者」と「エミリアを愛することについての最も正当な権利を持つ者」は、最終的にエミリアと結婚することになったパラモンということになる。

このうち、「エミリアを最も愛している者」がパラモンであるとの判定は、何を根拠に下されたのだろうか。ケネス・ムア (Kenneth Muir) は、エミリアを最初は女神としてあがめたパラモンの方が、エミリアを最初から女性として愛したアーサイトよりも、エミリアを正しく愛していると考えべきなのだろうと指摘する⁽¹⁶⁾。確かに、アーサイトは、エミリアを女神であると言ったパラモンと自分を比較して「私は彼女を女性として愛し、関係を持ちたいのだ (I love her as a woman, to enjoy her) (II.ii.165)」と言うが、この対照はその後劇中で明確には発展していないように思われる。また、パラモンは、激情にかられて何度もアーサイトをののしり、特に、第3幕第6場では、決闘中にシーシェース一行がやって来る音を聞いたアーサイトが2人とも死刑になるからいったん決闘を中止しようと提案する言葉に従わずに、非理性的にも決闘を続けようとしたりすることから、これらを理性を失うほどエミリアを愛している表現として解釈することもできる。しかし、これらの要素からは、パラモンが激情家であるということは感じられるものの、パラモンの方がエミリアを愛していることを示す明確

な描き方はされていないようである。つまり、テキストには、パラモンの方がエミリアをより正しくまたはより多く愛しているというはっきりした根拠を見出すことができない。

「エミリアを最も愛している者」という判定の根拠として明確に指摘できる要素は、パラモンがヴィーナスを信奉し、アーサイトがマルスを信奉しているという対照のみなのではないだろうか。N.W. ボーコット (N. W. Bawcutt) は、第3幕以降、パラモンがヴィーナスの徒、アーサイトがマルスの徒として描き分けられているとする⁽¹⁷⁾。また、ロイス・ポッターの指摘によれば、2人の性格は第1幕では区別されていないが、第2幕第2場から冷静なアーサイトと情熱的なパラモンという像が対照的に表現され、その後、オセローや『アントニーとクレオパトラ』のアントニーにも匹敵する、マルスとヴィーナスの影響下にある人間としての対照的な描かれ方に発展するという⁽¹⁸⁾。これらの指摘に従えば、パラモンが人間であるエミリアを女神と崇め奉るのに対してアーサイトが女性として愛すると表明したことも、パラモンがアーサイトに比べて非理性的なまでの激情家であることも、すべて、マルスの影響下にある冷静な武人としてのアーサイトと、非理性的で情熱的なヴィーナスの信奉者であるパラモンという描きわけにつながると考えることができる。つまり、「エミリアを最も愛している者」という神々の判定の根拠は、エミリアへの愛情の正しさや深さとしては登場人物たちにも観客にも感受できず、神々による判定後に、パラモンがヴィーナスの信奉者であったことから遡って納得するしかないような曖昧なものではないか。

それでは、2番目の条件である「最も正当な権利を持つ者」がパラモンであるということは具体的に何を指しているのだろうか。“the truest title (最も正当な権利)” という言葉は、エミリアをめぐるパラモンとアーサイトの重要な争点を連想させる⁽¹⁹⁾。パラモンとアーサイトの争いは、第2幕第2場に、パラモンがエミリアを見て恋を表明したすぐ後にエミリアを見て恋を表明したアーサイトを、パラモンが糾弾するところから始まった。

If thou lovest her,
Or entertain'st a hope to blast my wishes,
Thou art a traitor, Arcite, and a fellow
False as thy title to her.

おまえがあの人を愛したり、私の希望をしぼませるような願いを抱いたりしたら、アーサイト、おまえは裏切り者だ。そして、あの人に対しての
おまえの権利が不正なものであると同じくらい、不正な人間だ。(II.ii.171-74. 斜体は筆者による。)

パラモンは、エミリアに対するアーサイトの “title” を “false” であると言う。この “false” という言葉は、この後も、パラモンがアーサイトを罵る言葉として使われ、

アーサイトが死ぬ前にパラモン言い残す言葉、“I was false/Yet never treacherous. (私は不実だったが、決して君を裏切ったことはなかった。) (V.iv.92-93)” につながる⁽²⁰⁾。アーサイトは最初はパラモンの主張を認めないが、死ぬ間に自分が“false”であったと認める。また、劇の最後にシーシェースが神々の判定について総括した台詞の中には、パラモンがエミリアに対して持つ権利のことが述べられている。

Your kinsman hath confessed the right o'th' lady
Did lie in you, for you first saw her and
Even then proclaimed your fancy. He restored her
As your stol'n jewel and desired your spirit
To send him hence forgiven. The gods my justice
Take from my hand and they themselves become
The executioners.

そなたのいとこは、姫に対する権利が
そなたにあることを告白した。なぜなら、そなたが
姫を最初に見て、すぐに想いを明らかにしたのだから。

彼は、盗んだ宝石として姫をそなたに返し、
そなたの魂からの許しを得て天国に送られることを
望んだ。

神々は私の手から裁きの権利を取り上げて、
自ら刑の執行人となられたのだ。(V.iv.116-22)

このように、第2幕から自分の権利の正当性を主張していたパラモンに加えて、劇の最後にはアーサイトとシーシェースもその権利を認める。つまり、“false”な“title”しか持たないアーサイトは死に、パラモンがエミリアと結婚することになった。“the truest title”を持つ人と結婚させてくれという、ダイアナへのエミリアの祈りが、かなえられたのである。

しかし、パラモンが最初にエミリアを見て恋心を述べたということが、アーサイトが死んでパラモンがエミリアと結婚することの根拠となるほど重みのある権利であるということには、すんなりとは納得がいかない⁽²¹⁾。まず、『二人の貴公子』では、主材源の「騎士の話」とは異なり、2人が昔かわした「愛の問題で互いの邪魔をしない」という誓いについては作品中全く触れられない⁽²²⁾。このため、最初に見たことによる権利を主張するパラモンの言葉は、少々滑稽な感じさえる。また、パラモンは自分が最初にエミリアを見て恋をしたという事実を第3幕第6場でシーシェースに対して以下のように述べているのに、この事実は大きな問題として取り上げられない。

the fair Emilia —
Whose servant, if there be a right in seeing
And first bequeathing of the soul to, justly
I am —

見ることと

最初に魂を捧げることによる権利が
あるとすれば、私こそがお仕えすべき
美しいエミリア様 (III.vi.146-49)

パラモンは、この言葉に続けて、エミリアを最初に見て恋をしたということに何がしかの権利があるのならその権利を侵す行為は裏切り (treachery) であると言うが、こう言われたアーサイトは、愛することが裏切りであるというのなら裏切り者になろうというような修辭的な言葉で開き直る。そして、パラモンが最初にエミリアを見たということによる権利は、この時点ではシーシェースを始めとする登場人物達からは看過されてしまう。このように、最初にパラモンが権利について言い出したときの滑稽な印象と、中盤でパラモン以外の登場人物がこの権利を問題視しないことを考えると、最後になって突然アーサイトとシーシェースがパラモンの権利を認める豹変した態度には違和感を抱き、パラモンの権利の正当性に疑問を感じざるをえない⁽²³⁾。

男性達の態度とパラモンの権利の疑わしさは、アーサイトが“false”であったと認める男性達の判断とは対照的なエミリアの反応として、テキスト中にも表現されているように思われる。それは、アーサイトが自身を“false”ではあったが“treacherous”ではなかったと述べて死んだ直後のエミリアの台詞である。

I'll close thine eyes, Prince; blessed souls be with thee.

Thou art a right good man and, while I live,

This day I give to tears.

お目を閉じましょう。天国の御霊らのもとに行かれますよう。

あなたは本当に善い人でした。生きている限り、

この日を涙に捧げましょう。(V.iv.96-98)

“Thou art a right good man (あなたは本当に善い人でした) (V.iv.97)” という言葉は、死者に送ったなにげない言葉のようでありながら、“false”、“treacherous”という言葉のすぐ後にあえて“right”、“good”と言わせていることを考えれば、アーサイトが“false”であるという価値観の否定の表現と考えることができる。“the truest title”を持つ人を夫にというエミリアの祈りをかなえた神々の判断の根拠とは、エミリアにとっても観客にとっても疑わしいものであったと言えるのではないだろうか。

これまで分析してきたように、「最もエミリアを愛している者」、「最も正当な権利を持つ者」と結婚させてくれという女神ダイアナへのエミリアの祈りは、パラモンがヴィーナスの信奉者でありエミリアを最初に見た人間であるという、エミリアの思いもよらなかった根拠を元になえられた⁽²⁴⁾。エミリアは最初の2回の嘆願と同様、ここでもまた3人のうちの最後の嘆願者であった。また、エミリアは、祈りの中で「花嫁の姿をしてい

ても心は乙女 (I am bride-habited,/But maiden-hearted) (Vi.151)」と言い、2人のどちらかを選ばなければならないが「選ぶという罪を犯していません (I/Am guiltless of election) (154)」と述べて、男性に欲望を抱いていないことを示す⁽²⁵⁾。この祈りも、女性との絆を大切に、男性との結婚を望む心を持たず、そのために2人の男性のうちのどちらを選べないというエミリアの姿勢から出てきた嘆願であった。そして、祈りがかなえられたことにより、エミリアの望まなかったアーサイトの死とパラモンとの結婚がもたらされ、この日は、エミリアが生きている限り「涙に捧げる」日となったのである。

3. 結論

これまで論じてきたように、女性との絆を大切に男性との関係を忌避するエミリアの3回の嘆願は、常にエミリアの思惑とは異なる方向にエミリアを追いやった。第1幕では、エミリアが同じ女性である王妃達のために行った嘆願によって、パラモンとアーサイトがエミリアに恋するきっかけが生まれた。第3幕の嘆願は、女性らしい哀れみの心と、男性2人の恋心に対する無理解に基づいていたが、これによって、勝者との結婚と敗者の死を伴うパラモンとアーサイトの決闘という、エミリアの望まない結果がもたらされた。第5幕では、男性への欲望の無さから結婚相手を選ぶことができないために純潔の女神ダイアナに結婚相手の選択をゆだねたが、この祈りも、エミリアの意図とかけ離れたかなえられ方をされた。最も自分を愛し最も正当な権利を持つ人と結婚したいというエミリアの単純な願いは、パラモンが激情に身をゆだねるヴィーナスの信奉者でありエミリアを最初に見た人物であるという、エミリアにとっては問題にならない理由を根拠にかなえられ、アーサイトの死がもたらされたのである。

嘆願は『二人の貴公子』の第1幕、第3幕、第5幕の3回にわたって行われ、エミリアは常に3人のうち最後の嘆願者であった(第1幕では3人の王妃の嘆願を受けた3人のうちの最後の人物であり、最後の嘆願者でもあった)。この整然とした配置からも読み取れるように、女性性にこだわり男性との関わりを拒否するエミリアの一貫した態度が常に皮肉な結果を呼ぶというこの構造は、物語を動かす推進力としてこの劇に強固に組み込まれていると言える。

この構造は、シェイクスピアのロマンス劇からの流れの中で考えたとき、どのような意味を持つのだろうか。ロマンス劇での超自然の存在は、『ペリクリーズ』の女神ダイアナや『シンベリン』のジュピターのように舞台上に登場して人間の和解と幸福を導いたり、『嵐』のエアリエルのように人間のために働いたり、『冬物語』で神託を授けるアポロンのように正しい裁きを下したりする存在であった。これに対して、『二人の貴公子』の超自然の存在は、舞台上に登場せず、曖昧な徴を示して人間を喜ばせたあげく思いもよらない運命の転変を投げかける疑わしい存在となった。明確な神々の像から、曖昧で疑

わしい像への変化がここにある。この変化と、エミリアの主體的な行動が常に皮肉な結果を呼ぶという一貫した構造を考え合わせれば、表現の焦点が、超自然の存在から、翻弄される人間の側に移ったことが読み取れるのではないか。

また、この構造の結果、翻弄されるエミリアの姿だけではなく、エミリアの逆説的な強さも表現されているように思われる。たとえば、エミリアが第1幕と第3幕で他人のために権力者を説得しようとする姿は、権力を振りかざすシーシェースの姿の疑わしさを浮き彫りにする。劇の最後では、アーサイトとシーシェースが、エミリアを最初に見たことによるパラモンの権利を突然認め、男性3人がすべて「神々」の裁きの正しさを認めるのに対して、エミリアだけは最後まで「神々」の判定を肯定する言葉を述べない。翻弄されるみじめさをどうにか正当化しようとあがいているようにも見える男性達と違って、エミリアはただ黙ってアーサイトの死を悲しむ。『二人の貴公子』のエミリアは、強い信念と行動の結果、皮肉にもその性向とはまったく反対の方向に追いやり、理解もできず制御もできない大きな力を解釈しようとして失敗する無力な存在でもある。しかしながら、その姿から、人間的な真摯な輝きを読み取れるような存在として描かれてもいるのである。これこそが、シェイクスピアが、ロマンス劇の後に、フレッチャーと共に表現するに至った人間の姿のひとつの形だったのではないだろうか。

注(1) 原題を直訳すると『二人の血縁の貴公子』や『二人の高貴な血縁者』などの訳になるが、現在出版されている邦訳の題名に従い、『二人の貴公子』とした。シェイクスピアとフレッチャーが劇のどの部分を担当したかについては研究者の間で見解が分かれているが、本稿では、第1幕と第2幕第1場、第3幕第1場と第2場、そして、第5幕の第1場34行目以降、第3場、第4場をシェイクスピア、それ以外をフレッチャーが書いたと仮定した。共作についての概略はPotter, pp. 16-34、詳細な研究史はVickers, pp. 402-32を参照のこと。また、書かれた年については、Potter, pp. 34-35を参照のこと。

(2) ジュリア・ブリッグス (Julia Briggs) は、この劇をシェイクスピア作品の中で最も結末が苛酷な劇の1つであり、ロマンス劇とは全く雰囲気を変えていると指摘している (p. 225)。

(3) 最初の場面の暗い表現については、多くの批評家が指摘している。王妃達の姿と言葉の不吉さについては、Lief and Radel, pp. 414-15、Frey, pp. 111-13を、また、婚礼の行列に伴う歌がもし出す暗く不吉な印象については、Herman, p. 350、Lief and Radel, p. 414、Frey, p. 111を参照のこと。

(4) 本稿の『二人の貴公子』本文の引用は、ロイス・ポッター (Lois Potter) 編集のアーデン版から行う。また、日本語訳はすべて拙訳を使用する。

(5) ムア (Muir) は、シェイクスピアが書いた第1幕での運命と神々への頻繁な言及を、第5幕のマルス、

- ヴィーナス、ダイアナへの祈りの場面に向けての準備であるとしている (pp. 129-30)。
- (6) このような超自然の存在の表現は、主材源であるチョーサーの『カンタベリー物語』中の「騎士の話」での人間的な神々の登場とも異なっており、これらの特異な表現が意図的なものであることが伺える。姿を現さず和解をもたらさないという、『二人の貴公子』における神々の表現の特異性については、ボーコット (Bawcutt) が指摘している (p. 38)。
- (7) かつては、エミリアが、自分の意見を持たず結婚相手すら自分で選ぶことのできない主体性のない人間と評されていた時代もあったが、近年は、明確な価値観を持ち、主体的に行動する人間としての再評価が進んでいる。シャノン (Shannon) は、エミリアを静的な人物とする批評を批判し、エミリアの主体性を主張している (pp. 667-68)。また、ポッター (Potter) によれば、現代の上演では、エミリアが結婚相手を選択できないということに関して、エミリアに同情的な演出がなされている (p. 94)。
- (8) この、“Being a natural sister of our sex” の主語が王妃なのかエミリアなのかということについては2通りの解釈ができる (Potter, I. i. 125n を参照)。主語がエミリアだとすれば、「自分は女性との絆を大切に作る人間なので」という意味になる。主語が3人目の王妃であったとしたら、「あなたは絵ではなくて生きている女性なので」という意味になるが、そうであったとしても、“sister of our sex” という言葉が女性同士の絆を強調している。
- (9) この一節のエロティシズムは、多くの批評家によって指摘されている。たとえば、「非常に熱のこもったエロティックな言葉」 (Malette, p. 33)、「この部分の表現は非常に官能的」 (Bruster, p. 12) 等の意見がある。ただし、ジョナサン・ベイト (Jonathan Bate) は、オウィディウスの色欲としての解釈を否定して、エミリアとフラヴィナの関係を、「性的関係以前の愛へのシェイクスピアのあこがれの印」とする (pp. 266-67)。
- (10) 第5幕の3人の祈りが劇中3度目の嘆願であり、最後のこの嘆願のみがシーシェースへの願いではなく神々への直接的な祈りであることは、ボーコット (Bawcutt) が指摘している (p. 39)。
- (11) リチャード・ヒルマン (Richard Hillman) は、この台詞を發したエミリアは、自分を抑えることを説得のための巧妙な技術として理解していると評している (p. 150)。
- (12) ペンギン版 (Bawcutt 編) の注 (III.vi.191n) によれば、“that” は “to show that” の意。
- (13) 劇中の3人の祈りの順番 (ヴィーナス、マルス、ダイアナ) は、材源の1つである可能性のあるボッカチオの「テセイダ」(チョーサーの「騎士の話」の材源) のフランス語訳版の影響を受けた可能性もある (Potter, p. 45)。また、チョーサーの「騎士の話」において、祈りの順番ではなく神殿の記述の順番に従っている可能性も考えられる (Thompson, p. 199)。
- (14) F. W. ブラウンロー (F. W. Brownlow) は、エミリアの祈りが最後という位置にあることの重要性に着目し、マルスとヴィーナスの力がダイアナの力の影響を受けていると指摘している (p. 501)。
- (15) *The Riverside Chaucer*. p. 56. 2325 行目。
- (16) Muir, p. 143.
- (17) Bawcutt, p. 23.
- (18) Potter, p. 45.
- (19) バートラム (Bertram) は、“title” という言葉が劇中で頻繁に出現する重要な言葉であること、パラモンとアーサイトが第2幕以降、エミリアに対する “title” を争い、エミリアの祈りの中にもこの言葉が出てくることを指摘している (pp. 326-28)。劇中の “title” という言葉の分析については、Hedrick, p. 56 も参照のこと。
- (20) Potter, II.ii.174n.
- (21) Hartwig, p. 188; Muir, p. 143.
- (22) チョーサーの「騎士の話」では、パラモンが、エミリアを最初に見たときと、脱獄後にアルシーテに出会ったときの2度、以前かわした「愛の問題で互いの邪魔をせず、いつでも互いを助ける」という誓いを持ち出してアルシーテを責める (『完訳カンタベリー物語』73頁と90頁)。パラモンの権利の正当性が最後のアルシーテの死に結びついたという解釈は、チョーサーのテキストには示されていない。
- (23) 第3幕から最後まで、シーシェースの考える正義の疑わしさがテキストに表現されているという分析については、Lief and Radel, pp. 419-25 を参照のこと。
- (24) セオドア・スペンサー (Theodore Spencer) は、パラモンがアーサイトと違っていたのは「先にエミリアを見たこと」と「マルスではなくヴィーナスに祈る分別があったこと」だけだと皮肉っている (p. 218)。この2つの要素は、ここで言うエミリアの祈りがかなえられた2つの疑わしい根拠と対応している。
- (25) 選択することが処女神ダイアナへの罪になるという指摘については、Bawcutt, p. 42 を参照のこと。

引用文献

- Fletcher, John, and William Shakespeare. Ed. Lois Potter. *The Two Noble Kinsmen*. Walton-on-Thames, Surrey: Nelson, 1997. (Arden Shakespeare: Third Series.)
- The Riverside Chaucer*. General Ed. Larry D. Benson. 3rd ed. Oxford: Oxford UP, 1987.
- チョーサー『完訳カンタベリー物語 (上)』榊井迪夫訳、岩波書店、1973年。
- Bate, Jonathan. *Shakespeare and Ovid*. Oxford: Oxford UP, 1993.
- Bawcutt, N. W., ed. *The Two Noble Kinsmen*. By William Shakespeare and John Fletcher. Harmondsworth: Penguin, 1977.
- Bertram, Paul. “Paul Bertram (essay date 1965).” *Shakespearean Criticism*. Vol. 58. Ed. Elisabeth Gellert. Detroit: Gale Group, 2001. pp. 322-30. Rpt. of “The Composition of the Play.” in *Shakespeare and The Two Noble Kinsmen*. Rutgers UP, 1965. pp. 264-82.
- Briggs, Julia. “Tears at the Wedding: Shakespeare’s Last

- Phase." *Shakespeare's Late Plays: New Readings*. Ed. Jennifer Richards and James Knowles. Edinburgh: Edinburgh UP, 1999. pp. 210-27.
- Brownlow, F. W. "F. W. Brownlow (essay date 1977)." *Shakespearean Criticism*. Vol. 9. Ed. Mark W. Scott. Detroit: Gale Research, 1989. pp. 498-502. Rpt. of "'The Two Noble Kinsmen,'" in *Two Shakespearean Sequences: 'Henry VI' to 'Richard II' and 'Pericles' to 'Timon of Athens'*, U of Pittsburgh P, 1977. pp. 202-15.
- Bruster, Douglas. "Female-Female Eroticism and the Early Modern Stage." *Renaissance Drama New Series* 24 (1993): 1-32.
- Frey, Charles H. "Grinning at the Moon: Some Sadness in *The Two Noble Kinsmen*." Frey, *Shakespeare, Fletcher and The Two Noble Kinsmen*. pp. 109-20.
- ed. *Shakespeare, Fletcher and The Two Noble Kinsmen*. Columbia: U of Missouri P, 1989.
- Hartwig, Joan. *Shakespeare's Tragicomic Vision*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1972.
- Hedrick, Donald K. "'Be Rough With Me': The Collaborative Arenas of *The Two Noble Kinsmen*." Frey, *Shakespeare, Fletcher and The Two Noble Kinsmen*. pp. 45-77.
- Herman, Peter C. "Peter C. Herman (essay date 1997)." *Shakespearean Criticism*. Vol. 50. Ed. Kathy D. Darrow. Detroit: Gale Group, 2000. pp. 348-61. Rpt. of "'Is this Winning?': Prince Henry's Death and the Problem of Chivalry in *The Two Noble Kinsmen*," in *The South Atlantic Review*. 62.1 (Winter, 1997): 1-31.
- Hillman, Richard. *Intertextuality and Romance in Renaissance Drama: The Staging of Nostalgia*. New York: St. Martin's Press, 1992.
- Lief, Madelon, and Nicholas F. Radel. "Linguistic Subversion and the Artifice of Rhetoric in *The Two Noble Kinsmen*." *Shakespeare Quarterly*, 38.4 (Winter, 1987): 405-25.
- Mallette, Richard. "Same-Sex Erotic Friendship in *The Two Noble Kinsmen*." *Renaissance Drama New Series* 26 (1995): 29-52.
- Muir, Kenneth. *Shakespeare as Collaborator*. New York: Barnes, 1960.
- Potter, Lois. Introduction. *The Two Noble Kinsmen*. By John Fletcher and William Shakespeare. pp. 1-129.
- Shannon, Laurie J. "Emilia's Argument: Friendship and 'Human Title' in *The Two Noble Kinsmen*." *ELH* 64 (1997): 657-82.
- Spencer, Theodore. "The Two Noble Kinsmen." William Shakespeare and John Fletcher. *The Two Noble Kinsmen*. Ed. Clifford Leech. Signet Classic. 1986. pp. 217-41.
- Thompson, Ann. *Shakespeare's Chaucer: A Study in Literary Origins*. Liverpool: Liverpool UP, 1978.
- Vickers, Brian. *Shakespeare, Co-Author*. Oxford: Oxford UP, 2002.